

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アンデス山中の農村における食生活の変化 (変わりつつける『世界の食文化』)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5625

かつてインカ帝国の中心であったクスコは、ペルー・アンデスの深い山並みに囲まれた古都である。このクスコの町から東の方向に、天気の良いときなら大きな雪山が見える。この高峰が、クスコ地方の盟主といわれるアウサンガテ峰（六三八四メートル）である。そして、この山の向こう側、つまりアマゾン側で、わたしは民族学の調査のために暮らしたことがある。そこはマルカパタという地方で、インカの末裔として知られるケチュア民族が暮らし、インカ以来の伝統的な色彩の濃い暮らしを今も送っている。

このマルカパタに、一九七八年から八七年までのあいだ、私はほとんど毎年のように通い、通算で約二年間暮らした。その後も調査をつづけるつもりであったが、調査

アンデス山中の農村における食生活の変化

山本 紀夫 国立民族学博物館名誉教授・高地研究所主宰

アンデスの奥地ではトラックが唯一の交通手段。マルカパタへも、かつてはトラックの荷台に乗って行った。後方の雪山は、アウサンガテ山。



(やまもと のりお)

1943年生まれ 大阪府出身
専門分野 ● 民族学・植物民族学
著書 ● 『インカの末裔たち』、
『ジャガイモとインカ帝国』、『雲
の上で暮らす—アンデス・ヒマ
ラヤ高地民族の世界—』、他

の継続を断念せざるを得ない状況になった。一九八〇年代の半ばころからペルーの山岳地帯で反政府組織によるテロ活動が激しくなり、その影響がクスコ地方にも波及してきたからだ。その後もペルーの治安は悪くなる一方で、やがて日本政府はペルーへの渡航自粛を促す事態となり、私もペルーでの調査を諦めざるを得なくなったのである。

数年前、このマルカパタを久しぶりに訪れてみた。驚いたことに、クスコからマルカパタに向かう道路は、舗装こそされていないものの、とてもよくなり、そのおかげで毎日定期バスが走るようになっていたのである。かつては定期的な交通便がなかったのも、不定期に走るトラックの荷台に乗せてもらい、砂埃りや寒風に耐えてクスコからマルカパタに向かったものであった。しかも、悪路のせいで、車がしばしば故障したり、土砂崩れなどのために、うまくいって丸一日、ときに二、三日もかかったのである。

マルカパタに到着して、もっと驚くことがあった。それについて述べるまえに、ここでマルカパタについて概要を紹介してお



ビール
マルカパタの中心地のプエプロでは、伝統的なチャ酒よりもビールが飲まれるようになっている。

こう。マルカパタは、日本でいえば郡にあたる行政組織であるが、大阪府ほどの広い面積をもつ。ただし、そこを走る自動車道路は一本だけで、ほとんどのところへは徒歩が唯一の交通手段となる。そして、そこに約六〇〇〇人の村民がいるが、この大半が先述したケチュア民族であり、彼らは標高四〇〇〇メートル前後の高原地帯に住む。一方、標高約三一〇〇メートルのところにも一〇〇戸ほどの集落があり、ここは

スペイン語で町を意味するプエプロと呼ばれる。この集落こそは、マルカパタの中心地であり、そこには中学校や保健所、教会などのほか、雑貨屋などの店もある。そして、そこに住むのも先住民ではなく、一般にメステイソンの名前で見られる先住民とスペイン人との混血なのである。

さて、私がマルカパタに到着して驚いたのは、このプエプロの変貌ぶりであった。まず、教会の前にある、いつも閑散としていた中央広場がキオスク風の数多くの店によって埋め尽くされていた。そして、その店で売られている品物の中心は都市部から運ばれてきた、化学染料で染められたと思われるケバベらしい色の衣料品であった。また、パイナップルやバナナ、その他の熱帯果実を売る店もある。いずれも、道路状態の改善でマルカパタへのアクセスが容易になり、商品経済が浸透してきたからであろう。

店は、教会前の広場だけでなく、集落のなかにも何軒もある。これらは以前からあった店だが、中に入ってみて様相が一変していることに驚かされた。品数が豊富になり、太平洋岸から運ばれた魚さえ売られる

ようになっていたのである。私がマルカパタに滞在していたとき、店で魚を見ることは一度もなかったが、天井をみて納得した。かつてマルカパタには電気がなく、夜になれば漆黒の闇のなかでランプを灯して暮らしていたのに、いまや天井から吊り下げられた電灯が店内を照らし、その電気のおかげで冷蔵庫まであるのだ。太平洋岸から運ばれた魚も、この冷蔵庫のおかげでアンデス山中にある農村でも食べられるようになったのであろう。

村びとの話によれば、最近の食の変化は魚食の侵入だけにとどまらないようだ。かつて主食として日常的に食べていたジャガイモの比重が小さくなり、それにかわってパスタやパンを食べる人が増えているという。また、酒は、かつてはチチャとよばれるトウモロコシから造った醸造酒が祭りなどに欠かせないものであったが、その祭りでさえもチチャのかわりにビールを飲む人が多いらしい。これらも、マルカパタへの都市部からのアクセスが容易になり、現金経済が浸透してきたせいなのであろう。

では、マルカパタの住民の大半を占める先住民の人たちの食生活も大きな変化をとげて

いるのだろうか。残念ながら、このときは時間がなく、それを明らかにすることはできなかった。が、おそらく、あまり大きな変化はないだろうと、私は思っている。それというのも、先住民の人たちの大半がプエブロから標高差で一〇〇メートルほど歩いて登った高地で暮らしており、そこは依然として電気もなく、店もないからだ。また、その暮らしは、家族ごとに農業も牧畜もおこない、少なくとも食料に関しては自給自給体制を維持し



広場

かつて何もなかった広場に多くの店が出され、衣料品や果物などが売られるようになった。後方は、カトリックの教会。(いずれも筆者撮影)

たものだからでもある。

このような自給自足的な暮らしを高原地帯で送る先住民とは異なり、プエブロに住むメステイソたちは一九八〇年代当時からパンや米、パスタ、さらに野菜や果物などの食料を店などで購入していた。また、チチャ酒も造るのが大変なので、よほどのことがない限り、店で買ったビールを飲んでいた。さらに、彼らのなかには子どもをクスコの町の学校に入れたり、出稼ぎなどに行つて、都市部とも密接な関係をもっていたのである。

おそらく、このような背景があったからこそ、プエブロに住む人たちにとって新しい食品も抵抗感がほとんどなく、それゆえに容易に受け入れることが可能になったのである。このことはまた、道路網の発達により都市部から農村部へのアクセスが容易になったことがアンデスの山岳地域における人々の食生活の変化に拍車をかけていることも物語るであろう。それというのも、広大な面積をもつマルカパタのなかで、自動車道路が通じている集落はプエブロだけであり、そこでこそ食生活の顕著な変化が生じているからである。